

大英圖書館藏 敦煌本「李璣雜詠法」殘卷についての考察上
スタイン蒐集評

序

朽尾 武

フランス国立圖書館藏ペリオ蒐集敦煌本「李璣雜詠法」殘卷の考察に續けて「スタイン蒐集本」について考察を加える。この書については大英圖書館の「The British Museum」女史の畫力により、原本を拜見することができた。

敦煌本は銀部の第六句から錢部、錦部、羅部、綾部、素部、布部（一部注を缺く）までの殘卷である。今回は銀、錢、錦部をよとし、残りを下として分けて考察することにした。底本に慶應義塾大學藏「李璣百廿詠法」を用いた。これはペリオのあとと同じである。敦煌本と對校することにより、互いの性格を明確にすることが出来る。

一、敦煌本「李璣雜詠法」と敦煌類書

敦煌類書は羅振玉蒐集のペリオ「スタイン本」にすでに收められ、「王三慶の敦煌類書」には詳細に研究がなされている。瀛澗滄語對の類であるが、いずれも殘卷であるので、敦煌本「李璣雜詠法」との關係を明確にし、どこに、なぜ、因果關係は、必ずしも感じられる。これについては今後の課題にしたい。

二、慶大注本題法再論

ペリオについての考察においてすでに述べたが、題法は元版澤林廣記と古今合璧事類備要が主要資料であることが明確になった。合璧事類の財貨源流は題法では「貨源」とする如きであり、何の指本のないものもほぼ二書によって説明がつく。今回はこれを詳述するのが目的ではないので、別の機會に譲る。この二類書は南宋の成立であるので、少くとも題法は南宋以降に成立したことになる。また、詩とその注においても敦煌本と相異が認められ、特に注は右の二類書の影響の下、改變を加えられている。

可能性がある。これについても今後の検討課題であらう。

敦煌本から唐の張庭芳注を類推すると慶大注本の系統の諸本に未知の張方法の系統のものかも知れない。張庭芳注に敦煌本に近い簡略なものではなかつたか。

三、敦煌本とその翻字

敦煌本は後に述べるように題と讀點及び修正箇所は未筆である。影印本では見えない。原稿の翻字はペリオの時と同じように朱を用いたが、カラー印刷ではないので異色である。或程度知ることが出来る。字體は楷書に改めた。影印本と對比して欲しい。慶大注本もそうであるが、敦煌本には明かに誤寫と思える箇所がある。これは古寫本の宿命的なものである。また典據が亦うればから解明できなかつたものもある。敦煌本の類書にその秘密を發見できるかも知れない。これらの課題を今後明かにしたい。

四、諸本對照表について

現在する李嶠集及び李嶠雜詠(百廿詠、單題詩ともいう)は多數によるが、敦煌本、池底叢書等古本系、唐詩紀等後の全唐詩の祖本系に三大別があるので、その異同を明確にするため諸本對照表を作製した。唐詩紀本より古い同系の銅活字本(唐五十家詩集、上海古籍出版社刊所收)、唐詩二十六家等があるが、唐詩紀(全唐詩稿本)、聯經出版事業公司影印本にも收める)を全唐詩の祖本と一應認めここに採用した。一部諸本間に異同は認められるもの、全唐詩系と言って支障はない。今回参考に止めて考察の對象にしなかつた。

敦煌本と古本系の諸本間には異同は認められるが、全唐詩系諸本との異同はと甚しくはなない。ただ、敦煌本と古本系との間に認められる決定的異同についてはペリオの時と同様ほとんどを解明できなかった。これもまた今後の課題である。兩者の異同が李嶠の手で行われたものか、別人の手になるものかはさうしなないが、別人の手になるものとすれば少し手が込み過ぎていゝさうである。少し敦煌本の資料により何らかの秘密の解明をしたいと考えている。

老浮滿月光

銀河 靈山有珎 靈仙閣 朱明王

後漢王莽改五銖錢為貨布周泰五年火府鑄錢

五銖方

九府昔興周

後漢王莽改五銖錢為貨布周泰五年火府鑄錢

天下天龍帶泉寶地高入重溝

食貨志曰錢在重

後漢王莽改五銖錢為貨布周泰五年火府鑄錢

趙壹秉初之何曾勸欲

漢趙詩曰君龍

後不及表錢何曾

不病去康

不爾虛鶴吸食史絕

何曾為華陽太守性貪使史巡門索財人每日慮

錢

漢使小事促河陽史障新

漢馮大系錦半

仙石曉與滿蜀江春

山

又具錦裝成濯色

文花驚製綺人

綺在迴文之叔恐去詩莫愁子

錦織綺十四

錦綺之屬帷屏朝夕教流

蓮花隨帳秋月鑒惟明

此指詩藻惟明

月雲薄衣初

肩清

蓮花隨帳秋月鑒惟明

此指詩藻惟明

月雲薄衣初

春燈

秦宮織錦

秦宮織錦

秦宮織錦

金鏤通秦國

玉屑

落花

落花

鳳飛龍遠園

何當少障回

何當少障回

何當少障回

何當少障回

何當少障回

何當少障回

何當少障回

遠方

漸躍上花

漸躍上花

漸躍上花

畫情通

畫情通

畫情通

畫情通

水

水

水

水

日春

日春

日春

日春

Table with 19 columns numbered 1 to 19.

光浮滿月光銀河 靈山有跡獲瀑布也詩 仙閣表明王孫氏瑞圖曰明王 錢五銖方立漢

九府昔興周食貨志曰周太公立九府鑄錢 天龍帶泉寶地馬入重漢 如龍在地莫如馬

後漢王莽改五銖錢為泉貨後光武惡其 趙壹囊初乞何曾筋筋欲收漢趙一詩曰 一書銀錢何曾

字穎孝日食方錢猶不聞盧鵠吹貪吏總采求仲知為華陽太守性貪使使巡門索門人哥曰靈 錦

漢使巾車促河陽 步障新漢馮夫人鑿錦車送馬孫公主 雲浮仙石曉霞滿蜀江春 錦石

又其錦裝成覆色 汲汲色美迴文花 鷲製綺綺人晉書載為秦刺史後流沙取妾其妻蘇氏在家

錦書曰綺惟屏朝夕 散流彩通重首以席婦人有錦屏風 羅帷妙舞裾隨動嬌聲入

扇清古詩飄我羅裏裙 蓮花隨帳秋月登維明 古宮關薄婦人有蓮花帳雲薄衣初

老燈小翼似輕 雲衣夕日露裳秦宮織織織 流思切琴聲前朝刻始皇 請聽琴聲日織

擊然綾金鏤通 秦園青綾 漢君三秦記曰秦始皇 以金鏤綾之落花 花遙寫

鳳飛鸞遠 圖雲古詩客從遠方來 贈我鸞又曰古 色帶冰霜 光含霜雪文

何當少障 同與日將懸素擢手 天津女織 骨洛浦妃古詩曰牽牛星敗 河漢

水光元遠 方魚漸躍上花鴈初飛 古詩曰客從遠方來道我鸞 魚尚書武王渡河日魚人

畫張通螢影娥庭 聚日輝婦人有素畫張 又翠妻拒城 福樂行看楚好扇 空切故人

衣斑蟻好 詩新御績 劍裁裁呈細眉 表素王冠義之時始衣麻布 語孔子裏表 暴泉飛挂

鸞之浣 則天光上有水懸下 四圍挂白鸞天台曰暴布飛流以介道 孫布登三相劉君關四方 幸

白春斗粟朱稷棘 華方 公孫弘為漢丞相財布散中為三公 漢高祖吾以印衣

歲乙卯月林鍾日在柳較定

歲乙卯月林鍾日在柳較定

李嶠雜詩注 S. 555 翻字 朱ははる讀點 錢・錦等の題詞や訂正が施されており、ペリオとも同じ形式がとられている。影印本において朱ははると見えぬ。

諸本對照表

114 敦S 銀

光浮滿月光
靈山有玲瓏
仙閣表明王

錢

五銖方立漢
九府昔興周
天龍帶泉寶
地馬入重溝
趙壹囊初乏
何曾筋欲收
不聞盧鵠吟
貧吏抱來求

地底叢書本銀

思婦屏輝掩
遊人燭影長
玉壺新下箭
桐井舊安林
色帶長河色
光浮滿月光
靈山有玲瓏
仙閣薦明王

錢

漢日五銖建
姚年九府流
天龍帶泉寶
地馬列金溝
趙壹囊初乏
何曾筋欲收
金門應入論
玉井莫來求

慶大注本銀

思婦屏輝掩
遊人燭影長
玉壺新下箭
桐井舊安林
色帶長河色
光浮滿月光
靈山有玲瓏
仙閣薦明王

錢

漢日五銖建
姚年九府流
天龍帶泉寶
地馬列金溝
趙壹囊初乏
何曾筋欲收
金門應入論
玉井莫來求

內閣文庫藏銀

思婦屏輝掩
遊人燭影長
玉壺新下箭
桐井舊安林
色帶長河色
光浮滿月光
靈山有玲瓏
仙閣薦明王

錢

漢日五銖建
姚年九府流
天龍帶泉寶
地馬列金溝
趙壹囊初乏
何曾筋欲收
金門應入論
玉井莫來求

唐詩紀 銀

思婦屏輝掩
遊人燭影長
玉壺初下箭
桐井共安林
色帶長河色
光浮滿月光
靈山有玲瓏
仙閣薦君王

錢

漢日五銖建
姬年九府流
天龍帶泉寶
地馬列金溝
趙壹囊初乏
何曾著欲收
金門應入論
玉井莫來求

全唐詩選本銀

思婦屏輝掩
遊人燭影長
玉壺初下箭
桐井共安林
色帶長河色
光浮滿月光
靈山有玲瓏
仙閣薦君王

錢

漢日五銖建
姬年九府流
天龍帶泉寶
地馬列金溝
趙壹囊初乏
何曾著欲收
金門應入論
玉井莫來求

教 S 錦

地底叢書本錦

慶天注本錦

內閣文庫藏錦

唐詩紀錦

全唐詩藏本錦

漢使巾車促
河陽步障新
雲浮仙石曉
霞滿蜀江春
色美迴文妾
花鬢製綺人
惟屏朝夕發
流彩過重首

漢使巾車促
河陽步障新
雲浮仙石曉
霞滿蜀江春
色美迴文妾
花鬢製綺人
若逢朱太守
不作夜遊人

漢使巾車促
河陽步障新
雲浮仙石曉
霞滿蜀江春
色美迴文妾
花鬢製綺人
若逢朱太守
不作夜遊人

漢使巾車促
河陽步障新
雲浮仙石曉
霞滿蜀江春
色美迴文妾
花鬢製綺人
若逢朱太守
不作夜遊人

漢使巾車遠
河陽步障陳
雲浮仙石日
霞滿蜀江春
機迴迴文巧
紳兼束髮新
若逢楚王貴
不作夜行人

漢使巾車遠
河陽步障陳
雲浮仙石日
霞滿蜀江春
機迴迴文巧
紳兼束髮新
若逢楚王貴
不作夜行人

羅

羅

羅

羅

羅

羅

妙舞裾隨動
嬌聲入扇清
蓮花隨帳發
秋月鑿惟明
雲薄衣初卷
蟬翼似輕
秦宮織織毅
流思切琴聲

妙舞隨裾動
嬌歌入扇清
蓮花依帳發
秋月鑿惟明
雲薄衣初卷
蟬飛翼轉輕
若珍三代服
同擅綺紈名

妙舞隨裾動
嬌歌入扇清
蓮花依帳發
秋月鑿惟明
雲薄衣初卷
蟬飛翼轉輕
若珍三代服
同擅綺紈名

妙舞隨裾動
嬌歌入扇清
蓮花依帳發
秋月鑿惟明
雲薄衣初卷
蟬飛翼轉輕
若珍三代服
同擅綺紈名

妙舞隨裾動
行歌入扇清
蓮花依帳發
秋月鑿惟明
雲薄衣初卷
蟬飛翼轉輕
若珍三代服
同擅綺紈名

妙舞隨裾動
行歌入扇清
蓮花依帳發
秋月鑿惟明
雲薄衣初卷
蟬飛翼轉輕
若珍三代服
同擅綺紈名

教 S 素綾

金縷通秦園

慶大注本綾

內閣文庫藏綾

唐詩紀綾

全唐詩殿履綾

青綠遠漢君

為衾值漢君

青綠值漢君

為衾值漢君

為裘指魏君

為裘指魏君

落花遙寫鳳

落花遙寫霧

落花遙寫霧

落花遙寫霧

飛鶴近圖雲

飛鶴近圖雲

色帶水霜影

色帶水凌紫

色帶水凌紫

色帶水凌紫

馬眼水凌影

馬眼水凌影

光含霜雪文

光含霜雪文

光含霜雪文

光含霜雪文

竹根雪霰文

竹根雪霰文

何當步障

何當畫秦女

何當畫秦女

何當畫秦女

何當畫秦女

何當畫秦女

同與日將暈

煙際坐氤氳

煙際坐氤氳

煙際坐氤氳

煙際坐氤氳

煙際坐氤氳

擢手口口女

濯手天津女

濯手天津女

濯手天津女

織腰洛浦妃

織腰洛浦妃

織腰洛浦妃

織腰洛浦妃

織腰洛浦妃

織腰洛浦妃

織腰洛浦妃

織腰洛浦妃

遠方魚漸躍

魚腸遠方至

魚腸遠方至

魚腸遠方至

遠方望

遠方望

上花鴈初飛

鴈足上林飛

鴈足上林飛

鴈足上林飛

鴈足上林飛

雁足上林飛

畫帳通螢紫

砧杵調風響

砧杵調風響

砧杵調風響

妙奪鮫綃色

妙奪鮫綃色

娥眉聚日輝

凌紈寫月輝

凌紈寫月輝

凌紈寫月輝

光騰月扇輝

光騰月扇輝

行看嫵婦扇

非君下山路

非君下山路

非君下山路

非君下路去

非君下路去

空切故人衣

誰賞故人機

誰賞故人機

誰賞故人機

誰賞故人機

誰賞故人機

素

素

素

素

素

素

素首句缺四字第
三句缺二字

數 5 布	沈底叢書本布	慶大注本布	內閣文庫藏布	唐詩紀布	全唐詩殿版
御績創義皇	御績創義皇	御績創義皇	御績創義皇	御績創義皇	御績創義皇
緇冠表素王	緇冠表素王	緇冠表素王	緇冠表素王	緇冠表素王	緇冠表素王
瀑泉飛挂鶴	瀑泉飛挂鶴	瀑泉飛挂鶴	瀑泉飛挂鶴	瀑泉飛挂鶴	瀑泉飛挂鶴
火浣則天光	火浣有炎光	火浣有炎光	火浣有炎光	火浣擅炎方	火浣擅炎方
孫布登三相	孫被登三相	孫被登三相	孫被登三相	孫被登三相	孫被登三相
劉君闡四方	劉衣闡四方	劉衣闡四方	劉衣闡四方	劉衣闡四方	劉衣闡四方
幸因春斗粟	佇因春斗粟	佇因春斗粟	佇因春斗粟	佇因春斗粟	佇因春斗粟
來曉棣華芳	來曉棣華芳	來曉棣華芳	來曉棣華芳	來曉棣華芳	來曉棣華芳

弃夫

敦復類書(語對) 子

賢臣妾

漢朱買臣貧苦人也家貧好讀書不事產業妻小女匿曰
 有何少妻送之買臣曰今已九九不侍之妻曰公知之乎將賦死
 貴不足以解衣行又足令婦失子與及後夫治是買臣之婦見識之
 命夫妻致後國因歸舍中供不食歎曰妾願而自死

覆水

美子月 施書不佳

判史

盧鵠 李誠為而天分會發而盧鵠何也
 留崇 郭公建隆也行出六盧樹下理歎不取須
 熊軾 月史年 盧其並

楚相孫叔敖碑 舊碑闕五十餘字此
 用續刻者故其文全
 楚相孫君諱鮒字封敖本息縣人也六國時期思屬
 練得 四節 董列子
 病甚臨卒將無棺葬令其子曰儵曰吾許人金骨吾
 子嘗之樂長與相君相善雖言千金實不負也卒後
 數年王置酒以為樂儵益乃言孫君相楚之功即
 恍惚而歌曰食更而可為而不可為為廉吏而可為
 而不可為貪吏而不可為都嘗時有汙者而可為者
 子孫以家成廉吏而可為者當時有清者而不可為
 者子孫困窮投棺而嘗教者皆苦者皆苦者皆苦者
 獨不見嘗相孫封敖廉潔不受錢湯遂行若 關首
 漢延熹三年五月廿八日立

開札（中略）其利銀也。尔雅曰白金謂之銀也。詳見金注（註）。金財貨源云流金、銀銅鑄鉛錫之

考證 太平御覽銀

鄧廣曰：遂言也。

古今合璧事類備要（子）外集財貨門（子）財貨源流 金者金銀銅鐵鉛錫之總名（中略）彼銀白金次之。

銀（美）者錄（自）金謂之銀其一一謂之（一）爾雅曰荆州其山鎮曰衡山（中略）其利丹銀齒葉（鄭玄註）齒象齒也葉犀

別名（皮）者錄（即）茶磨金（漢）。漢書院影印本。

廣大法本のこの題注は財貨源（金之部）すをわち財貨源流によって書されてゐる。ペリオの論考で述べたように拾遺

事類によって書かれて考えられる。明の彭大翼の仙堂肆考（一八四）珍寶金（注）にも財貨源流が見え、これは合璧事類の

らの引用であらう。格物總論の引用もまたこの書に見えらるのである。（格物總論はペリオについての論考で述べた。）

思婦屏（擲）言婦人坐銀屏以思之也。

遊人（燭）影長 古詩曰何來燭不遊也言遊人秉銀燭遊也。

考證 ○思婦 沈隱（三五）應王中丞思遠（沈休文約）白華臨靜夜衣靜滅（注）（注略之）方購竟入園影

際（中）來（注）臨（注）受（注）光（注）於（注）隙（注）照（注）一（注）間（注）受（注）光（注）於（注）戶（注）照（注）室（注）中（注）無（注）遺（注）物（注）況（注）受（注）光（注）於（注）宇（注）宙（注）乎（注）說（注）文（注）曰（注）隙（注）際（注）

也○輪曰光昭遂門（注）方故方暉（注）竟盡也（注）隙（注）八（注）圓（注）故影亦圓也（注）高樓（注）切（注）思（注）婦（注）西（注）園（注）游（注）上（注）才（注）善（注）曰（注）曹（注）子（注）健（注）

比（注）辰（注）詩（注）曰（注）明（注）月（注）照（注）高（注）樓（注）流（注）光（注）正（注）徘徊（注）上（注）有（注）然（注）由（注）心（注）婦（注）非（注）數（注）有（注）餘（注）象（注）樓（注）文帝（注）深（注）落（注）池（注）詩（注）曰（注）乘（注）筆（注）夜（注）行（注）湖（注）道（注）

遙（注）步（注）南（注）園（注）丹（注）霞（注）來（注）明（注）日（注）華（注）星（注）出（注）雲（注）間（注）的（注）向（注）日（注）高（注）樓（注）思（注）婦（注）見（注）月（注）而（注）思（注）切（注）也（注）西（注）園（注）謂（注）魏（注）氏（注）鄰（注）都（注）之（注）西（注）園（注）也（注）文帝（注）

遙步南園丹霞來明日華星出雲間的向日高樓思婦見月而思切也西園謂魏氏鄰都之西園也文帝

毎以月夜集文人才子遊於兩園(和刻本三才卷五)。思婦はうれいに沈む婦人。○屏幃 銀屏風を照らす月の光。思婦は高樓に一人はつねと思ひふけるさま。大平御覽。服用部 屏風(宋起) 居注曰 元嘉中 中下水

劉瓛奏風聞廣州刺史章朗於州作綠沉銀泥漆屏風六十餘牀請以事光朗官(音)。同前(音)記曰

「石虎作金銀鈕屈膝屏風衣自織畫義士仙人禽獸之像讚者皆二十言(以下略)」(和刻本)

唐揚炯和園長史答十九兄(詩) 宮徵諧鳴右光輝掩燭銀(宮徵は五音の中の宮と徵の二音。音律・音樂)

○遊人燭影 夜庭園において燭を秉つて遊ぶ貴人。汶還十九首之十五「生年不滿百常懷千歲憂(注略)」畫想若夜長何不秉燭遊(五臣作游良曰秉執也)(和刻本古度注)

釋義 14 思婦屏の幃掩へり、美しい婦人が高樓の閨房の銀屏風の傍らにおいて物思ひにふけりみとり淋しくしている姿を月の光が掩うように照べているさま。高樓思婦の先行作品の主題を襲い、(ひねり)のもの。

14 遊人燭の影長し。貴人(思婦の夫を和れぬ)が文人才子とともに廣壯な庭園において燭をとって詩歌管絃を樂しんでおり、その影が長く尾を引いているさま。

14 玉壺新下(玉壺) 穆木主階曰披圖(披圖) 視天下之宝器有銀燭漏刻以玉為壺以銀為箭

14 桐井旧安(桐井) 梁昭明太子設曰桐井銀床牽轡(轡) 古詩曰石園鑿井銀作床又曰双桐生露井也

考證 ○穆天子傳 出處未詳。參考 穆天子傳 乃披圖(披圖) 視典周觀(周觀) 太子之瑤(瑤) 器(注略) 曰天子之瑤(注略) 曰天子之瑤(注略)

玉東瓊珠燭銀 銀有精光如燭(中略) 黃金之膏(注略) 天子之瑤萬金(漢新 629) ○玉壺 玉製の漏刻のつぼ。初學記(初學記) 漏刻

之別名 張衡漏水轉渾天儀制曰以左手把箭右手指刻以別天時早晚(張衡の讀みよいか)

敬示。同書 張衡漏水轉渾天儀制曰以銅為器再置差置實以清水下各開孔以玉乳吐漏

水入兩壺右為夜左為晝 殿變漏刻法曰為器二重圓皆徑尺差立於水輿(輿) 蹠之上為金龍口吐

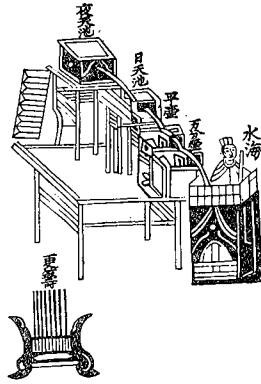
水入兩壺右為夜左為晝 殿變漏刻法曰為器二重圓皆徑尺差立於水輿蹠之上為金龍口吐

水入兩壺右為夜左為晝 殿變漏刻法曰為器二重圓皆徑尺差立於水輿蹠之上為金龍口吐

挈壺晝夜

甲錄

銅壺百刻之圖



事林廣記

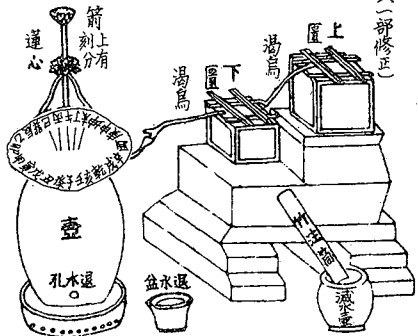
宋末

黃帝創漏水利器以分晝夜咸謂挈壺氏以百刻分晝夜冬至晝漏四十刻夜六十刻夏至晝漏六十刻夜四十刻春秋二分晝夜各五十刻漢律改爲百二十刻隋文帝大同十年又改用一百八十刻或增或減類皆疎濬蓋至於唐晝夜百刻一遵古制而其法有四置一夜天池二日天池三平壺四水分壺又有水海浮箭四置注水始自夜天池以入日天地自日天池以入于平壺以次相次入于水海浮箭而上以爲刻分 梁朝所用之制亦如於唐而其法以晝夜百刻分十二時每時有八刻二十分其二十四氣大凡每氣差二分半冬至日極短春分日均平夏至後行氣甚至後行縮乃陰陽升降之期今將二十四氣分圖于后

和刻本事林廣記

宋燕肅漏刻圖

古今圖書集成(部修正)



圖說 (六經圖說)

唐制有四置一夜天池二日天池三平壺四萬分壺又有水海以水海浮箭以四置注水始自夜天池以入於日天池自日天池以入於平壺以次相注入於水海浮箭而上每以箭浮爲刻分也

今制有二置二渴鳥一石壺四十八箭竹筒注一銅節水小筒一減水盂一退水盆一匱一漆木爲之深一尺二寸徑三尺二寸五分壺以石爲之深二尺一寸五分徑一尺三寸二分內圍四尺一寸渴鳥二銅爲之上者長三尺二寸受水口徑三分出水口一分

水轉注入 踟躕 經緯之中 蓋上鑄金爲司辰 以兩手執箭 李蘭滿冽法曰 以銅爲湯鳥 以引器中水 於銀龍口中吐之 (初) 前は水時計 (漏刻) の目盛を指す矢 踟躕は水時計の水を受ける器 司神は司天臺の役人 時刻をばかり 晝夜を知らせむ 湯鳥は口曲つた筒を作り 水中に挿入し 空氣の力で水を引き上げる器。

○深昭明太子詩未詳 深庚肩吾 九日侍宴樂遊苑應令詩 玉體吹香 菊銀淋落 并桐 (初 四 九月九日)

玉杯の美酒が衣に咲く菊に薫り 銀のいげの影が并戸の傍の桐に映っている。同人 洛陽道 金門鑄出柳 桐井

○古詩 法舞歌詩 淮南王自言尊 百尺高樓臨天連 後園鑿井銀作牀 (初 七 井 似) 「半含泉」(書符詩集)

○魏明帝 猛虎行 雙桐生空井 枝葉自相加 (鑿桐) 無題 (初 七 似 桐 生 慶大注本の露井は桃の故事であ

あり 空井がよい)。梁簡文帝 賦得雙桐生空井詩 季月雙桐井新枝 雜書林 (初 八 似 桐)

釋義 此玉壺に新に前を下す 漏刻の時を計る玉の壺に目盛の筭を下す。この壺は水海という。この前が銀製

の桐井に著まう牀を安んず。并戸の傍に桐が生えていて昔から銀のいげに著まわれている意。

此色帶長河色 光浮滿月光 即漢

數 S 光浮滿月光 即漢

考證 ○泊氏云 泊天河 天河謂之天漢 銀漢銀河河漢天津絡河明河 (月 似) ○沃選十三 謝莊月賦 列宿

掩綰長河 綰映善曰 從辭曰 若列宿之錯置 說文曰 綰 繫采飾也 毛詩曰 俾彼雲漢 流長曰 雲漢天河

也。何曰 月盈明時列星天河皆斡掩光彩也 (初刻本 六臣注 23 頁上) 李嶠秋山望月 李騎曹詩 一况

復高秋 明月正裴回 亭亭出 迎岫皎皎映 層臺 色帶銀河 滿光含玉露 開 (全唐詩 卷 4) ○梁戴

嵩 高 月重輪詩 重輪非是暈 桂滿月恒春 露凝好比圓扇 曹王 洛神 浮川 疑讓璧 入 類 燒銀 (初

月 讓璧の璧とは高和氏之璧の故事に依る 淮浦子 說山訓 馮氏之璧 夏后之璜 揖讓而進之

以合歡（四御儀判の）と。揖讓とは拱手の禮（會釋する）を行つて讓る。このばあいこの禮を行つて壁を讓る意。

釋義 光色は長河の色を帯び、この二句、光をそれれ二度用いることには特徴がある。これは長河（黄河）と銀河を對

にして立體化するための技巧である。銀河と黄河は連續している（博物志）と考へられていて、月の光を受けて銀色に輝

く黄河の色を受けて天河が銀色を帯びていることといふ。李嶠の詩に同趣向の作があるが、おもしろい。

光は満月の光を浮ぶ。銀河の輝きは満月の白銀色の光を受けて浮んでいる。注に讓壁の故事を引いたのは長河に

映る月が和氏の壁を思ひおせにからである。

冥山有玕（珍） 瑤（園） 曰銀瓊者刑法中（度）人不悲則出（本）礼曰山有器車注云銀瓊丹觀之屬也

仙閣（唐） 明王（海） 市三神山尽以自銀為宮閣又天子所居曰仙閣有銀宮金閣也

教 靈山有玕瓊 仙閣表明王（表）孫氏瑤園明王有道則出銀瓊

考證 靈山は蓬萊山のような仙山。珍瓊、珍奇なものの。注はるる「銀瓊、明王は賢明な王。瑤園に依れば「銀瓊

「銀瓊」ともは王者（明王）が中庸を守り、刑罰が公明であるためだといふとして現われるといふ。仙閣は仙人の住む樓閣

である。「仙閣は仙宮の門であるが、仙閣とは同意。「表は「表」の草體が不明。

○珠孫采之瑤園圖「王者冥不及醉刑罰中人不為非則銀瓊出（初）學記ニテ銀瓊御覽八ニ珍寶部（珍）

漢續瑤園圖記銀瓊のの聲。○孝經援神契「銀瓊也不汎自隨不盛自盈瑤園圖同（御）覽（瓊）」

○禮記七禮運ニ「山出器車河出馬圖（節）多注器謂若銀瓊也（注）法十三經の聲。○文選五法

思（漢）都賦（二）戶籠籠教員（顯）備（原）許（名）冠（首）貫（靈）山（閣）曰（中）路（測）仙（瀆）曰（龍）真（善）養（山）而（其）滄（海）之中（中）略（向）

○巨龍龍大龍也具顯風用カ之貌靈山海中蓬萊山（私）初平臣注法五の胡刻善法本五の6上。

○波紀 三八封禪書云「自威宣照昭使人入海求蓬萊方大瀛州此三神山者其傳在渤海中（注）略之」

去人遠（守）略諸僊人及不死之藥皆在焉其物禽獸盡白而黃金銀為宮閣（四）濛濛の標點本のの標

靈山部上 〇初三 道釋部 〇海内十州記 昆陵 崑崙山也 上有金臺玉闕 亦元氣之所合 天帝居

治處 (御覽 崑崙山 〇唐王勃 滕王閣序 豫章 王勃 向控 震宮 寶刹 香

壇 猶於 仙閣 (全唐文 〇李嶠 晚秋喜雨詩 翠閣 仙閣 連 隼 繞 畫 樓 (全唐詩 〇加 標 點 本

漢語大詞典 〇のは 王勃序の仙閣を仙宮とし、李嶠詩のそれを帝王の宮闕と分類。仙閣の語は初唐の王勃李

嶠のころから使われ始めたものなり。

釋義 〇靈山に珍瓊有り、神仙の住む靈山にはめでたき銀のやめがある。

仙閣に明王に薦む。金銀によつて作られた天子の居所の聖天子に銀のやめをたてまつる。

錢 貨流云錢之為幣以銅為之體圓孔方背面同好背有周郭周流四方之象也爰自禹湯始用金

鑄幣周太公立水府因法始名以錢之因合方輕重以銖所從來遠矣錢名青鳧龜貝地馬榆莢不

章 哀林廣記云開通孔空周世宗廢佛寺二千二百六十法割截身體利物猶為之又管子曰湯七

年早禹九年水湯以斤山銀禹以犀山之金并鑄幣以救人困也國語注云方泉后轉而曰錢也 漢

志秦始皇鑄算如周錢文曰半兩重如其文漢曰斤鑄重八銖文帝鑄重四銖亦稱曰今民間半兩中

最小輕者是四銖錢武帝建元一年鑄重三銖如錢文名三銖封皮曰三銖又有別種穿下有二銖

文恐以此三銖為三銖之記錢銖文曰半兩、錢今有折二有小錢、共有六樣錢文云漢武

帝元狩五年罷半兩錢行鉞銖也

考證 古今合璧事類備要外集 財用門 財貨源流 錢之為幣以銅為之體圓孔方背面同好背有

周郭周流四方之象也唐虞以前無開爰自禹湯始用金鑄幣周立水府因法輕重以銖所從來遠矣

(以下略之慶大注本の復源は財貨源流の省略形であらう同じく始名以錢之圖合方は合璧事類に

見文字には明版以前の本文の確認が必妥。本文中の唐虞以下は省略されたものあつた。また慶大注本の錢名
青鳧以下不見。内は錢の本體または邊。好は錢の孔。周郭は錢のまわり。「間流」はまわりをめぐること。錢の輕重を



五代後周 世宗の周 元通寶 五丁五八

錢といふ。明嘉靖刊本影印新學書局版文120。四庫全書影印本亦云120。○許氏云「滄 錢
「青鳧 鳧或鵞 平略」榆莢見上注(母子輕重漢以秦錢重更令人鑄榆莢錢(平略) 龍具
漢時人上書言古今以龍具為真今以錢易之以下略之) (新學書局影印本114) ○漢

書武帝更錢造銀錫為白金以為天用莫如龍地用莫如馬人用莫如龜故曰金二十四其一重八兩

圖之其文龍名曰白鵝(初三七錢)漢書食貨志下 標點本144。慶大注本の錢名は後から補つたものであろう。

○新編纂圖增類書類要事林廣記別集五貨寶類「貨泉公羊」管子曰湯七年旱湯以糶山禹以

歷山之金並鑄幣以救人困也。至周大公立九府圖法始名以錢錢圓合方輕重以錢。濶語注云古

曰泉後轉而曰錢。古文錢半兩漢注曰秦始鑄錢如周錢重如其文漢呂后鑄重八銖文帝鑄

重四銖應劭曰今民間半兩中 smallest 輕者是四銖錢武帝建元元年鑄重三銖如錢文名曰三銖。封氏

曰三銖又有別種穿下有二三。整文悉以此三畫為三銖之記錢重三銖文曰半兩半兩錢今有折

有小錢小錢共有六樣錢。五銖漢武帝元府五年能半兩錢行五銖錢(平略) 周通元寶

周世宗廢佛寺二千三百六十曰佛法割截身利物猶為之。况銅像邪。詔毀天下銅佛鑄錢(元至

順建安椿莊書院刻本中華書局初版中文出版社復印本109。内閣文庫藏元版鈔卷。初刻本不載。管子山

權一以救人困也。レリ而顯民之無權者。傍錄A漢書食貨志九府圖法李奇曰圖即錢也。圖一寸

而重九兩。師古曰此說非也。周官大府天府內府外府泉府天府職內職金職幣皆掌財幣之官故云

九府圖謂均而通也(中略)錢圖函方(錢圓合方)孟康曰外圓而內方也。輕重以銖師古曰言黃金以

斤為石錢則以銖為重也。國語注三周語下「景王二十一年將鑄大錢陰氏解古曰泉後轉曰錢」封氏「

(封演續錢譜) 源徳一「封氏曰半兩錢有重三銖兩字之中唯作半字不復爲兩入而穿下有二豎文

宣於此以二十畫爲三銖之記耶」傍線曰錢譜作「有折三小錢共六六樣皆篆文」傍線曰新五代史周

本紀云世宗「廢天下佛字三十二百三十六是時中國之錢乃謂之毀天下銅佛像以鑄錢嘗曰吾聞

佛說以身世爲妄而以利人爲急使其真身尚在苟利於世猶欲割截況此銅像豈其所惜哉」(標點

本必) 宋洪遵泉貨志三周通鑑錢參照封演の半兩錢の二三豎文について現存の錢を見るに疑問あり。

○右の淨林廣記の根據とする書物は濟書藝文志小説類所收の封演續錢譜(一卷散佚書)だと考えられる。

宋の洪遵の泉貨志(紹興十九年(二四九)七月晦日洪遵序刊藏新印本)の内容がほぼ一致する。また淨林廣

記の本文をほぼ踏襲しているのが明の董道の錢譜(續續卷四)である。淨林廣記所引の管子三三山權七十。漢志

(漢書三十四食貨志四) 國語注周語下韓氏解。新五代志周本紀云世宗等原文のままではなく、編集されたも

ので古くは初唐記三七錢。唐杜佑の通典八、錢幣上。近くは宋末元初の王應麟(三三三三九九)の汪海(八〇、

食貨錢幣等に類似的の記事が見られるが、詳細に渡る考證は本論の主目的ではないので別の機會に譲る。すでに前

回(ペリオ)で述べたように題注や注の一部は後世の増補が加えられたと考えられ、拾遺淨類や淨林廣記等が使わ

れたことは明白である。また慶元注本の成立時期も或る程度限定できる。

中国历代貨幣(新华出版社一九八二) 一部模写



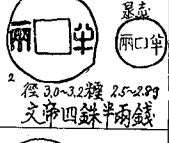
秦半兩錢 徑2.2 厚0.4



漢初榆莢半兩錢 徑0.9~1.0 厚0.4~0.5



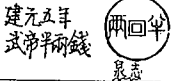
呂后八銖半兩錢 徑2.7~3.0 厚0.5



文帝四銖半兩錢 徑2.0~3.2 厚0.5~0.8



武帝三銖錢 銖三



建元五年武帝半兩錢 銖五



武帝元狩五銖錢 銖五



武帝赤仄五銖錢 銖五

漢曰五銖建漢曰元狩五年王宮初鑄五銖錢也
姚季九府流各有九府舜姚姓也太公九府圖法即錢也

【敵S】 五銖方立漢 九府者興周 食貨志曰周太公立九府鑄錢又漢用五銖錢行於天下

【考證】 ○漢書六武帝紀六一元狩五年春二月甲午(中略)罷五銖錢行五銖錢(標點本117)。同(四下)食貨志

四下「孝武元狩五年三月官初鑄五銖錢(標點本117)」。三官は漢代の上林苑にあった鑄錢所均輸鍾官辦

銅の二役所「五銖は五銖錢。前掲圖を参照。○姚季は漢日に對す。姚は舜の姓。虞舜という(尚書序)。

史記三十一平津書八「太史公曰農工商交易之路通而龜貝金錢刀布之幣興焉(漢書序)」。布泉者言貨

貨之流如泉也故周有泉府之官及漢王乃鑄大錢。布泉者言貨

流布故周禮有司三夫之布(中略)及者錢也。食貨志有契刀錯刀形如

刀(中略)以其形如刀故曰刀以其利於人也。又古者貨貝實龜(以下

略之)所從來久遠自高辛氏之前向矣靡得而記云故津道唐虞之

際(以下略)殷周之世(中略)虞夏之幣金為(以下略)漆籛曰即下或黃或白

或赤也。黃黃金也白白銀也赤赤銅也。見食貨志或黃或白或赤或

或黃金以益名(孟康曰二十兩為益為上幣銅錢識曰半兩重如其文為下幣(漢書)標點本117)。

【釋義】 漢日に五銖錢の、漢の武帝の時に五銖錢を制定され、武帝の元狩五年に半兩錢に替って五銖錢が

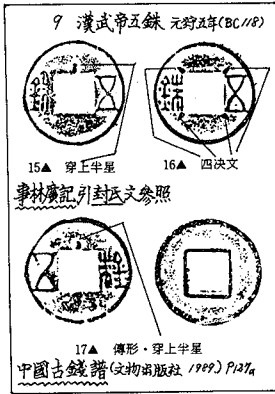
鑄造されたことをいふ。

【口】 右虞錢史記平津書云(賈逵注)灑灑周語曰虞夏商周金幣(以下略)黃金上幣銅錢為下

幣(以下略)姚季に九府流布の舜の時に九府の鑄造所が作られ錢幣が流布した。九府は周の制度に據るものであが平津書

によれば錢幣が流布してそれを鑄造した役所を九府に見立てたのであろう。スター本の方が理にかなっている。

【敵S】 九府者周に興る。九府圖法が周の太公によって作られ始めて錢が鑄造された。泉貨の解釋は史實に合わ



此かもしれなき、詩の作者がどう思ひて作詩したかが重要であり、その認識がまた史實に優先されることもある。

天龍帶泉寶 貨殖志曰在天莫如竜在地莫如馬貨寶流行故謂之泉布又云王莽五銖錢更鑄小錢

重一銖文曰泉布此乃光武中兵之象也謂光武時居南陽泉布王令布行於天下之兆也天竜亦錢

名也

地馬列金 世統曰王濟字武子晉人也移第於北邙山買地作射埽偏錢布地取人号曰金鼎也地

馬亦錢名也

錢5 天龍帶泉寶地馬入重漢食貨曰錢在天莫如龍在地莫如馬後漢王莽改五銖錢為泉貨

後光武惡真也王武子向北邙山下偏錢買馬將号為金埽

考證 ○漢書 食貨志題注考證參照。○貨寶流行云々 貨寶考證所引決詔 平津書參照。貨錢と寶

貨といひ、これが世間に流布すること、漢書三四下、食貨志四下一王莽居攝變漢制以周錢有子母相權於是

更造木錢、平略文曰木錢五寸又造契刀錯刀契刀其環如大錢身形如刀長二寸文曰契刀五首

錯刀以黃金錯其文曰一刀直五寸 後漢曰平略錯刀則刻之作字也。以黃金填其文以下略之與五

銖錢凡四品並行莽即真以為書劉字有金刀 迺罷錯刀契刀及五銖錢而更作金銀龜貝錢布之品

名曰寶貨 小錢徑六分重一銖文曰小錢直一 平略 天鳳元年 平略而罷大小錢改作貨布 平略其文

右曰貨左曰布 平略 貨泉 平略 文右曰貨左曰泉 平略 標點本 1111 118 119 120 121

五行二項不始時之開陽有童謠曰諧不諧在赤眉得不得在河北 平略 世祖建武六年蜀

童謠曰黃牛白腹五銖當復是時公孫述借號於蜀時人竊言王莽稱黃述欲繼之故稱曰五銖 漢

家貨明當復也述遂誅滅 平略 標點本 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

注之光武中興之象」とはこの童謠を指す。赤眉は漢末莽新の動亂の時王莽軍と區別する下眉に赤印を塗った。

漢書三四下、食貨志四下一王莽居攝變漢制以周錢有子母相權於是更造木錢、平略文曰木錢五寸又造契刀錯刀契刀其環如大錢身形如刀長二寸文曰契刀五首錯刀以黃金錯其文曰一刀直五寸 後漢曰平略錯刀則刻之作字也。以黃金填其文以下略之與五銖錢凡四品並行莽即真以為書劉字有金刀 迺罷錯刀契刀及五銖錢而更作金銀龜貝錢布之品名曰寶貨 小錢徑六分重一銖文曰小錢直一 平略 天鳳元年 平略而罷大小錢改作貨布 平略其文右曰貨左曰布 平略 貨泉 平略 文右曰貨左曰泉 平略 標點本 1111 118 119 120 121 五行二項不始時之開陽有童謠曰諧不諧在赤眉得不得在河北 平略 世祖建武六年蜀童謠曰黃牛白腹五銖當復是時公孫述借號於蜀時人竊言王莽稱黃述欲繼之故稱曰五銖 漢家貨明當復也述遂誅滅 平略 標點本 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

後光武帝に滅された。○應劭漢官儀下「王莽篡位以劉字有金刀罷五銖更作小錢文曰貨泉其文反白水真人此則世祖中興之瑞也」御覽八三三錢の略○漢書下「光武帝紀論曰中略以建
 半元年十二月甲子夜生光武於縣金注略之有赤光照室中」陳觀記曰「光昭堂中畫明如畫」中略是歲
 縣界有嘉禾生一莖九穗因名水武曰秀明王方士有夏實良者上言哀帝云漢家歷運中衰當再受
 命於是改號為太初元年稱陳聖劉太平皇帝以厭勝之及王莽篡位忌惡劉氏以錢文有金刀改改爲
 貨泉或以貨泉字文爲白水真人後漢書蘇伯阿爲王莽使至南陽遙望見春陵郭囁曰喏數也
 音子夜反氣佳哉鬱鬱葱葱然及始起兵還春陵還之舍南大光赫然觀大有傾不見初道士西門君
 惠李守等亦云劉秀當爲天子其王君受命信有符乎」四漢の標點本の白水真人は光武中興の豫
 言。錢文の金刀は二字合せて劉字。劉氏中興を忌んで貨泉とする。泉字を分けた白水。貨字を分けたと真人とす。
 光武帝の出身地白水郷から起る前兆。白水郷は春陵を言ふ。歴地要漢の200。

○世説新語下之下汰侈三「王武伯被責後弟北邙下潛諸公贊曰濟與從兄恪于平濟爲河南尹未拜行
 過于官中吏不時下道濟於車前鞭之有司奏京官論者以濟爲不長者尋轉太僕而王恪已見委任
 濟遂斥外于時人多地竟濟好爲射買地作地編錢西地竟時人號曰金溝漢作持」四漢の世説
 新語掖箋下62。漢錢181。

釋義 115. 天龍は泉寶に帯び、天龍の文は錢にめぐり、泉布の裝飾として龍の圖柄が書かれた(刻された)が、天龍の字が刻
 されたかと言ふ。

116. 地馬は金溝に列せ、地馬は錢を列ねたかといひ整理させる。

117. 前有、118. 地馬は重溝に入る。地馬は錢を重ねたかといひ整理させる。重は金の誤寫の可能性あり。



趙壹囊初乏（重） 后漢趙壹詩曰文籍雖滿腹不如一錢囊也（重）

何曾助款收（通） 晋何曾字季穎為大宰日食方錢猶云無下筋之處（通）

【款】 趙壹囊初乏何曾助款（通） 漢趙一詩曰文籍雖滿腹不及一囊錢何曾字季穎日食方錢猶無下筋之處（通）

【考證】 ○（後漢）趙壹詩「伊憂北堂上抗葬倚門前」文支從滿腹不如一囊錢（初錢一囊錢御覽卷下）

○趙壹疾邪賦（先秦漢魏晉南北朝詩） 漢詩六的深容詩（合璧事類） 餅賦（外集） 不如一囊東漢趙壹曰文籍雖滿腹一一

こゝに引く詩中「滿」字が慶大注本に類似していることに注目。漢詩題趙壹坎壈但し詩には言及せず。

○晉書（三） 列傳三 何曾「何曾字季穎陳國陽夏人也。曾略曾以老手屢乞遜位詔曰太傅明朗高亮執心

弘毅中略又司徒所掌務煩不可入勞諸奴其進太宰侍中如故中略然性奢豪發在華侈中略每燕

見不食太官所設帝輒命取其食蒸餅上不坼作十字不食日萬錢猶曰無下者處（標野本） 謝注

三三三〇〇 ○王隱晉書「何曾者後一日食至萬錢蒸餅上不坼作十字不食（此堂書劄） 餅上十字不食（四四）

蒸餅（注） ○應宏嶼云山版簿以「何曾食萬晉何曾性奢豪推棧重服窮極綺麗厨膳滋味過於王者且食

萬錢猶言無下筋處（一） 漢古書影印本 國立國會圖書館藏附音增廣古註蒙衣において助字ハ之候訓。

山版は「著」之同意。五山版一部傍訓を加える。五山版には返點候訓書入注け元來無し。

【釋義】 何曾助款初めて乏し、文章や書籍に腹一ぱいになるほどあるが、財布は空である。文章は山ほどあるが、食や病を癒す錢は無し。

何曾助款を收めんと欲す。一日に萬錢の食を平ける奢侈な何曾は十字の割れ目ができた焼餅でないかと著をつけ

ようとせしむ。

卒後數年、疣王輩酒、以為樂、優孟乃言、孫者相發之功、即此悔、商歌曲曰、貪吏而不可為、廉吏而不可為、而不可為、當時有汗名、而不可為者、子孫以家成、廉吏而不可為者、當時有清名、而不可為者、子孫因窮被禍、而賣、執貪吏、常若富、廉吏常若貧、獨不見楚相孫叔敖、廉潔不受錢、涕泣數行、中略、漢、延喜三年五月廿八日立、一、釋、三、此、四、數、先、秦、詩、二、歌、下、此、忱、慨、歌、

釋義 此金門に應に入りて論すべし、金門に入つて金錢を論すべきである。

此玉井に冀くは來り求めんとぞ。玉井に入つて錢を得たいものだ。

數5 此盧鵲の吠やを聞かず、貪吏が税金を取り立てに村に來ないので、鵲犬だちも鳴き騒がせぬ、貪吏は廉吏に對す、

欲深い役人、此貪吏來り求むるを絶つ、絶は絶字に見えろ、ただこの字は辭書類には見えない、絶字の草體は、絶、絶、以上晋王獻之であら、絶、絶、絶、絶、に似ておる、絶字と考えても支障をせらう。

錦 説文云錦、金也、其用功、重價、也、金、故、制、字、從、泉、与、金、也、錦、織、文、也、出、於、蜀、者、為、上、錦、五、色、備、也、錦、為、質、刺、成、故、名、曰、錦、繡、繡、羅、皆、文、繪、也、

為質刺成、故名錦也、錦、綺、羅、皆、文、繪、也、

考證 古今合璧事類備安、錦、附、繡、羅、布、麻、財、貨、源、流、錦、織、文、也、按説文錦、金也、作之其用功重價、

如金、故制字從泉與金也、然所出之處固多、惟出於蜀者為貴、或者又以織於外國者、錦、之、想、亦、中、國、所、无、有、云、耳、統、于、五、色、備、繡、為、質、刺、成、故、名、曰、錦、繡、繡、羅、皆、文、繪、也、新、興、影、明、本、四、庫、本、四、影、印、本、錦、は、お、い、ひ、刺、繡、とい、錦、は、織、の、織、維、で、織、つ、は、き、め、細、や、かな、布、ぬい、ど、う、の、臺、布、に、する、文、繪、は、あ、ざ、ぬ、び、化、絹、慶、大、注、本、題、注、の、本、文、

との異同は合璧事類の宋版か元版を確認する案あり、ただし、新興影印明嘉靖丙辰、三二一五、六、復宋寶祐、記又三、一三、老本を見ることができろのみ、○説文「錦、金也、作之、用功重、其價如金、故制字、泉與金也、」錦、は、お、い、ひ、刺、繡、とい、錦、は、織、の、織、維、で、織、つ、は、き、め、細、や、かな、布、ぬい、ど、う、の、臺、布、に、する、文、繪、は、あ、ざ、ぬ、び、化、絹、慶、大、注、本、題、注、の、本、文、

同文字と、劉、熙、釋、名、を、典、據、とす、四、叢、釋、名、四、釋、録、三、四、同、段、義、説、文、解、字、注、錦、、泉、、錦、、裏、、巴、織、文、也、注、略、之、从、

帛金聲とす。太平御覽八五錦の如し。説文曰錦、裏色織成也。とあり。釋名曰或て現行本文を記す。

漢使巾車使漢宣帝以錦劍車送烏孫公主也。巾、馬也。

河陽步障新 王君夫作絲布步障碧裡四十里石崇作錦步障五十里也石崇有河陽別墅

數S 漢使巾車促河陽步障新 漢馮夫人乘錦車送烏孫公主石崇列錦步障卅里為食

考證 漢書卷六西域傳云云初楚主侍者馮燎師古曰音了燎者慧也故以為名能史書習字嘗擬漢節

為公主使行賞賜於城家諸國敬信之號曰馮夫人為烏孫右大將妻中略宣帝徵馮夫人自問狀

遣謂者世二期門甘延壽為副送馮夫人馮夫人錦車持節服虔曰錦車以錦衣車也四漢

標點本(2) 六節一車漢書馮夫人出塞以錦車(16)

世說新語下下下次修三十一王君夫以綵繡金石季倫用蠟燭作放君夫作紫絲布步障碧裡四十

里石崇作錦步障五十里以敵之以下略之(四漢) 晉書三三列傳三石苞附崇參照標點本(10) 王君夫曰

王愷石崇曰河陽金谷園別業所持 六節一錦步障世說石崇錦步障四十里(16) 語對

晉書、步障石崇字季倫晉惠帝時為侍中居洛陽金谷園富於晉國晉武帝弟王愷與崇相論作紫絲

布步障卅里崇作錦步障五十里帝有珊瑚一株愷贈之亦崇笑之以馬鞭擊之以下略之(離雪堂无

注全集三編、唐寫本類書、鐵澁類書三十一、三三、惜口其具之同義)

釋義 漢使巾車促。漢之烏孫への使者が錦で飾った車に乗って節を持た馮夫人を促す。巾車は錦で裝飾し

河陽の步障新(下) 河陽の石崇の錦で作った步障が五十里も長く。步障は竹を立て塵を防ぐために幕を張

つもの。

雲浮山石脫霞陸蜀江春一本有錦山錦石度肩吾詩曰錦石鎮浮橋有錦石故也石上生苔

蘇文似錦謂之石錦蜀都人織錦華於江中濯之色就勝新也

數語

雲浮仙石曉霞滿蜀江春 山中有錦石又貝錦非文成濯色江波又靈雲色如亂錦

考證

○湘中記「惟當珍異度應機衡故曰衡山山有錦石斐然成文」(注)朝外說大觀漢朝(10) ○深使肩古

春和太子綱流橋下應令詩和簡文「懸門開溜水錦石鎮浮橋」(注) ○冰經注「崑崙山中略」又有塘賦全皇王釋

云信「錦石不凝」石山有錦石度肩古詩曰錦石鎮浮橋(17) ○冰經注「崑崙山中略」又有塘賦全皇王釋

相似如(1)湘精之闕光碧之堂瓊華之室紫翠丹房錦雲爛日(注)漢作景燭日耀(1)朱霞九光(冰經注)故

四遺(19) ○壬子年拾遺記「員嶠之山名環邱東有雲石中略有青長七寸黑色有白點鱗以霜雪覆之然

後作繭長一尺其色五綵織為文錦入水不濡其質輕軟柔滑(初)錦(註) ○梁沈約和劉中書仙詩

「霞衣不待縫雲錦不須織」(注) ○靈異部「仙道略」梁詩(10) ○汶還(四)左思蜀都賦「貝錦斐成濯色」江

波黃潤比隋蕭區(金)所過(注) ○劉曰「中略」貝錦(文)譙周益州志「云成都織錦既成濯於江水」(中略)化水濯

之不如江水也(中略)善曰「注詩曰善兮非兮成是貝錦」(注) ○濟曰「中略」貝錦斐然成其文章濯於江水益發

其色貝錦織文也(非)文(注) 觀感盛金之器(和刻)注法文選(10) 胡刻本善注(10) ○唐楊炯和劉侍郎(入)隆

唐觀「福地陰陽合仙都日月開(中略)伏檻排雲出飛軒遠洞迴(中略)百泉珠為窟寶峯錦作衣」(注)沈

洪澤(三)六(注)湯洞集(二)中華書局 ○唐駱賓王泊雲泥出石詩「重巖北危石幽澗曳輕雲繞鎮仙衣

動飄蓮羽蓋分錦色連花靜若光葉葉童」(注)深劉刻本唐人集(注)沈洪澤(三)六(注)湯洞集(二)中華書局

同上(注) 艷情式(郭)氏(答)盧照鄰詩「峨眉小上月如眉濯錦江中霞似錦錦字迴(文)欲贈君(劍)壁(層)峯

自(注) 絨(同上)文集(二)六(注)沈洪澤(四)六(注)補「白氏六信」錦「織文高質厥謹織貝文錦之屬」(注) 尚書(高)頁

釋義

の雲は山(仙)石の曉に浮び、雲に錦のように色むした石に曉の光を受けてあややかに浮び、山石は仙山の錦のように色む

してあやす石、崑崙崙山や衡山等仙山の石、山石と仙石は同じ意味で使われているが、山が仙山を指すことから仙に誤っ

た。霞は蜀江の春に満ち、錦を濯う蜀江に色を春霞は一面にあやかし輝く。「たものか。

點畫無試才情之妙趣今遺古名曰遊機圖然讀者不能悉通蘇氏笑曰襄徇宛轉自爲語言非彼家人莫能解之遂發卷頭題全襄陽陌賈之感其妙絕因送陽臺文關其而賤車從禮迎蘇氏歸漢南思好愈重以下略之(蘇若蘭遊機圖詩序)次以右以亦寸迴文詩配之配之方(讀圖內詩括例)と掲載されてるのでその一部を示す。晉詩十五卷。「外經 仁智懷德聖虞唐真妙顯爭重雲章。臣賢惟聖配英皇倫匹離飄浮江湘回讀。傷慘懷慕增憂心堂空惟思詠和音藏推非心聲發曲奏商絃激楚流清琴。(以下略之) (詳細な讀例が示されるが別の機會に譲る。日本では本朝文粹所收の楨在列等の作がある。)

○左傳「子皮欲使尹何爲邑子產曰然未知可居否伊何年子皮曰使大夫往而學焉夫亦愈知矣子產曰不可子有美錦不使人學製焉太官太邑身之所庇而使學者製焉其爲美錦不亦多乎言官邑之重重於美錦也(藝文五錦妙? 左傳正義四下襄公三十二年2667。注指美錦116)。○古詩爲食仲卿妻

作并序 無名氏「漢末建安中廬山小吏焦仲卿妻劉氏爲仲卿母所遣自誓不嫁其家避之乃沒水而死仲卿聞之亦自縊於庭樹時傷之爲詩云爾。孔雀東南飛五里一徘徊十二能織素十四學裁衣(中略)妾有繡腰襦葳蕤自生光(中略)雞鳴外欲曙新婦起嚴粧着我繡襦事事四五通足下躡絲履頭上玳瑁光腰若流紈素耳著明月耀指如削葱根口如含朱丹纖纖作細步精妙世無雙上堂拜阿母阿母怒不止(四叢汪彙新詠一卷1747のこ) ○泊氏六帖二綺二殿漢織文織文錦綺之屬(20)。

○王子年拾遺記「買嶠之山(中略)有羅帳長七寸黑色(中略)其質輕軟柔滑(初)錦柔滑(16)考證引用拾遺記參照。泊氏六帖三「綺」燿翼魏文帝詩綺羅日如雲輕華比燿翼卷綃綃織以卷綃織人泉客織綃綃於泉室出以賣之輕綃見上(20)。

釋義

色は美し迴文の妾 五采の錦の迴文を織つて思ひを傳えた空買活の妻。

光は輕し綃黑の質 綃黑(雲)未詳。光輕とは五采のつやあること。綃はつやなき意。黑は拾遺記の黒色

の経緯を聞かざりて。

數の心 此は化け敬為く製衣綺の人 焦仲卿の妻の思いを込めて織った華やかさうすきぬは花も敬為くばかり、つれなき夫の心と動かし。

若逢朱太守 不作夜遊人 一本漢時朱買臣會稽人也 為本郡太守帝曰 卿衣錦繡還故鄉矣史記

項羽藏秦不都閔中欲還楚曰富夫不還故鄉如錦衣夜遊耳此云太守謀也

數の心 惟屏朝夕發 流彩過重茵 褥也寡婦賦易錦茵以席婦人有錦屏風

考證 ○漢書六十四 朱買臣傳三十四上 朱買臣字翁子吳人也家貧好讀書不治產業常負薪樵賣以給食

買臣笑曰我年五十學買臣今已四十餘矣 中略 買臣不能留即聽去 中略 上拜買臣會稽太守上謂

買臣曰富貴不歸故鄉如衣繡夜行今子何如 泗濱のののの 標點本 中略 ○唐寫本類書 語對 一 棄

夫買臣妻 漢朱買臣會稽人也 中略 拜為侍中 帝謂買臣妻曰富貴不還故鄉如衣繡夜行又還會

稽太守 中略 漢書先生全集 三編 八 數准本類書に近し本文を慶大注本に見に

と考えられる。 ○漢書 買妻恥醜 中略 漢書朱買臣 百字 公用子會稽人 以下略之 故會博物館本古鈔

漢書の波古書院景印本。 ○文紀七 項羽本紀七 項王見秦宮室皆以燒殘破又心懷思欲東歸曰軍

貴不歸故鄉如衣繡夜行誰知父者說者曰人言楚人沐猴而冠耳果然張晏曰沐猴猶猴也 漢書曰

言猶猴不在久著冠帶以喻楚人性躁暴果然言果如人言也 泗濱のののの 標點本 漢書五錦引漢書

御覽五錦 以上同 六陌 錦 夜行 還鄉 漢書項羽曰富貴不還故鄉如衣錦夜行又武帝拜朱買

臣為會稽太守 以下略之 中略。

○晉潘岳寡婦賦 易錦茵以席婦人有錦屏風 丁儀妻寡婦賦曰 剛朱蘭以自垂 易云張以

御覽五錦 以上同 六陌 錦 夜行 還鄉 漢書項羽曰富貴不還故鄉如衣錦夜行又武帝拜朱買

臣為會稽太守 以下略之 中略。

○晉潘岳寡婦賦 易錦茵以席婦人有錦屏風 丁儀妻寡婦賦曰 剛朱蘭以自垂 易云張以

御覽五錦 以上同 六陌 錦 夜行 還鄉 漢書項羽曰富貴不還故鄉如衣錦夜行又武帝拜朱買

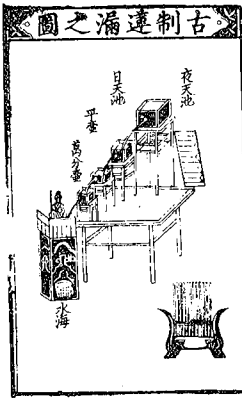
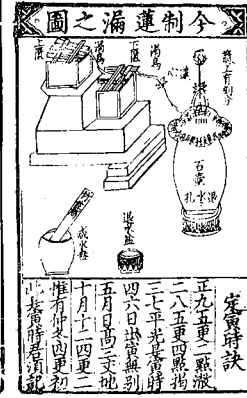
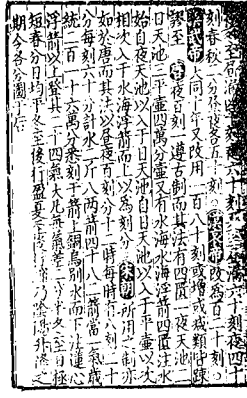
基本本文獻である。

注々 汕澄肆考 明 彭大翼撰 張幼學編 明 萬曆乙未(二十三年) 維揚彭氏刊本(藝文印書館影印)の外、文淵閣四

庫全書本(臺灣故宮博物院藏) 商務印書館影印本、同中國上海古籍出版社縮印本)。二三八卷補遺一二

卷より成る類書。

注3 漏刻のつげ 漏刻は水時計。つげは水を入れるつげ。本文中の圖参照。圖の位置が逆方向にさしてある。内閣文庫藏



元至順刊本。同臺灣故宮博物院藏。同書莊書院本。兩者日(は)同圖。注今圖書集成(曆象彙編曆法典九十九漏刻部)文皇影印本功のはこの元版に據つたものであろう。

注々 澆書 藝文志 小説類封 演繹錢譜(卷、伏書 源流誌等) 所收。

注5 源流誌十五卷 宋 洪遵撰、津訂源本 紹興十九年(二四九)七

月序刊本。叢書集成新編(四)所收。正用品偽品。刀布古品等は分類録圖を示す。

注6 國語章氏解 二十卷、吳章昭解 嘉靖中翻宋本 四載。また學術名著所收。

注7 羅雲堂先生全集 初編一七編。各編一冊より成る。羅振玉の考證學の大成。敦煌本他古鈔本の影印。マ貴

重である。羅振玉一八六六一九四〇（清末民國初の考證學者、鳴沙石室佚書、敦煌石室遺書等は二編に收められている。文學出版公司刊。

注⁹ 隸釋十九卷、宋、乾道三年（一一七二）洪适撰、明萬曆十六年（一五六八）刊、四部叢刊影印本、補訂漢魏碑文金文鏡銘索引

（隸釋篇）内野熊一郎編、高文堂出版社、昭和五十二年、本文を影印索引篇と二冊、漢魏の碑文を集成したもの。

注⁹ 寶韻妻蘇氏回文詩、明、馮惟訥撰、古詩紀、卷八、晉十八、蘇若蘭、璇璣圖詩、并序、讀法、吳琯等校、明萬曆十四年（一五六三）刊、文淵閣四庫全書影印本、叢部三三八、丁福保編、全漢三國南北朝詩、全晉詩卷七、外、學術名著世界書局、逯欽立輯校、先秦漢魏晉南北朝詩中晉詩十五卷等所收、いずれも讀法が示される、長谷川滋成著

東晉詩法、汲古書院、平成六年、員外、詳細な法解が示されている。

古今合璧事類備要卷之六十一

金 鑄金 銀 水銀 錫 鉛 錫 銅

金 鑄金 銀 水銀 錫 鉛 錫 銅

鑄金 銀 水銀 錫 鉛 錫 銅

鑄金 銀 水銀 錫 鉛 錫 銅

鑄金 銀 水銀 錫 鉛 錫 銅

鑄金 銀 水銀 錫 鉛 錫 銅

鑄金 銀 水銀 錫 鉛 錫 銅

鑄金 銀 水銀 錫 鉛 錫 銅

鑄金 銀 水銀 錫 鉛 錫 銅

鑄金 銀 水銀 錫 鉛 錫 銅

鑄金 銀 水銀 錫 鉛 錫 銅

鑄金 銀 水銀 錫 鉛 錫 銅

鑄金 銀 水銀 錫 鉛 錫 銅

鑄金 銀 水銀 錫 鉛 錫 銅

參考文獻

○類書類 詳細な書誌に省略、()内は略稱。隋初唐虞世南、北堂書鈔（一）卷（書鈔）。初唐歐陽詢藝文類聚

二〇卷（藝文）。盛唐徐堅初學記三十卷（初）。中唐白居易白居易泊氏六帖（貞）三帖事類集三十卷（六帖）。北宋李昉、

評御覽二〇〇卷（御覽）。

○梁蕭統撰唐李善注文選三十卷（宋淳熙本重彫鄴陽胡氏本、尋陽萬氏再刻本、中文出版社影印本（胡刻善注文選、

古今合璧事類備要卷之六十四

過五石 之比爾

錦 繡 綺 羅 布 麻

錦 繡 綺 羅 布 麻

錦 繡 綺 羅 布 麻

錦 繡 綺 羅 布 麻

錦 繡 綺 羅 布 麻

錦 繡 綺 羅 布 麻

錦 繡 綺 羅 布 麻

錦 繡 綺 羅 布 麻

錦 繡 綺 羅 布 麻

錦 繡 綺 羅 布 麻

同治字本(四部叢刊本、底本)商務印書館。唐李善。呂延濟劉長張鏡呂尚李周翰注(臣注)文選(卷)卷(足)利文庫藏明州刊宋本(汲古書院影印本(足)利本(臣注)法文選(臣注)李善注)。和刻本(臣注)法文選(和刻)法文選(汲古書院刊。李善五臣注)。

○四部叢刊 初編 續編 三編 商務印書館影印唐本(四叢)。百衲本(二十四史)便宜上四叢とする。

○叢書集成新編 二。冊(叢新)。同續編 六。冊(叢續)。新文豐出版公司刊。中華民國七十四年(一九八五年)。

○四庫全書 文淵閣本(四庫)臺灣故宮博物院藏(一五。冊)目錄一冊 臺灣商務印書館刊。中華民國七十五年(一九八六年)。

○古錢大辭典上下 丁福保編 中華書局刊 一九八二年十二月、北京。

○中國历代货币 新華出版社 一九八二年。

○中國古錢譜 劉巨成編 文物出版社 一九八九年。

○宋蜀刻本唐人集叢刊の(2) 上海古籍出版社 一九九四年。

○全唐詩 九。卷 康熙四十六年(一七。七)序刊殿版同影印本。同治字本。中華書局 一九六〇年。

○全上古三代秦漢三國六朝文 四冊 清嚴可均校輯 中華書局 一九五八年。

○漢藏敦煌文獻(漢文佛經以外部分)第一卷 斯五二五—一三八〇 四川人民出版社 一九九〇年。

○文史哲 敦煌的唐詩續編 黃永武 施淑萍著 文史哲出版社 中華民國七十八年(一九八九)。

○羅雪堂先生全集 注 參照。

○講座 敦煌漢文文獻 池田溫編 大東出版社、平成四年。

○敦煌出土文學文獻分類目錄 附解說(スライ本、ペリオ本) 西域出土漢文文獻分類目錄Ⅳ 金岡照光編 東洋文庫 一九七一年。

○敦煌類書上下 王三慶著 麗文公司刊 一九九三年。